

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 4月30日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520291

研究課題名（和文） 新しい『ファウスト』研究における多面的な解釈の総合の試み

研究課題名（英文） Versuch zum Synthetisieren der vielseitigen Deutungen in der neueren *Faust*-Forschung

研究代表者

田中 岩男（TANAKA IWAO）

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：70091618

研究成果の概要（和文）：本研究により以下の諸点が明らかにされた。① 歴史と神話を同時にはらむ『ファウスト』の特有の「歴史性」② 時間的にかげ離れた事象を重ね合わせ、類型化・典型化して考える方法論的原理 ③『ファウスト』全体をつうじゲーテの思考における本質的なパラメーターとしての〈自然〉④〈人工〉による〈自然〉の支配に顕著に表れた近代の暴力的な性格 ⑤ 近代に対するゲーテのアンビヴァレントな立場、等。

研究成果の概要（英文）：Durch die vorliegende Arbeit sind folgende Thesen festgestellt worden. ①die eigenartige Geschichtlichkeit des *Faust*, die die Geschichte und den Mythos zugleich in sich enthält ②das methodische Prinzip des analogisierenden u. typisierenden Zusammendenkens zeitlich auseinanderliegender Geschehnisse ③Natur als ein wesentlicher Parameter im Denken Goethes durch den ganzen *Faust* ④der gewaltige Charakter der Moderne, der vor allem in der Beherrschung der Natur durch die Kunst zum Ausdruck kommt ⑤ die ambivalente Einstellung Goethes zur Moderne usw.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：近代、歴史、神話、自然、救い

## 1. 研究開始当初の背景

(1) ゲーテ生誕250年（1999）を契機に、新校訂版テキストを始め各種の新資料が公刊され、『ファウスト』研究は明らかに新たな段階に入ったと見ることができる。

(2) 解釈の面でも実に多面的なアプローチがなされているが、①全体を総合する視点が欠如していると思われる。②言い換えると、テキストに「多義性・多層性」をもたらして

いる本質的なものそれ自体が十分に問われ、解明されたとはいいがたい。

(3) 近年の新しい『ファウスト』研究の多面的な解釈を総合する視点が求められている。例えば、最新のコメントルの一つで、最も重要なU・ガイアー（1999）は、テキストの「多次元性」を出発点に8通りの「読み方（解釈）」の可能性を具体的に提示している。しかし、それらを総合する視点、あるいはテク

ストにそのような「多義性・多層性」をもたらしている本質的なものそれ自体が問われることはない。

## 2. 研究の目的

『ファウスト』の特殊な「歴史性」の究明を中心に、多面的な解釈を総合する視点の提示を試みる。

- (2) 具体的には、① 文学社会学的方法と作品内在的解釈の統合・調和を目指す② 両者の交差するところに、『ファウスト』の「歴史性」の本質が求められると考えるからである。
- (3) 同時にそのことを通して、「近代」に対するゲーテの複雑で微妙な立場をも明らかにすることが期待される。

## 3. 研究の方法

(1) 『ファウスト』の「歴史性」の解明が重要な課題となる。その際『第二部』、なかでも「行為の悲劇」「支配者の悲劇」と呼ばれる第4幕・5幕を主たる検討対象として、歴史と神話の接点を探る。

(2) 「グレートヒェン悲劇」や「ヘレナ悲劇」の解明に特に有効だった作品内在的解釈と、テキストの歴史的背景を明らかにする文学社会学的方法との総合を模索する。

(3) 近代の人間ファウストの「救い」の検討を通じて、作品の「水平的次元」と「垂直的次元」との、さらには多面的な解釈の総合を可能にする視点の提示を試みる。

## 4. 研究成果

研究期間中に3本の論文を学会誌ほか、それぞれ査読付の雑誌等に発表し、幸いにも高い評価を得ることができた。論文「ヘレナ劇はどこで演じられているのか?——ヘレナの〈現実性〉をめぐって——」は、東北大学文学部教授・故原研二氏の追悼記念論文集『文学における不在』に寄せたものであり、方法論的に作品内在的解釈と文学社会学的方法との総合を試み、実践したものである。論文「山と海、そして火と水——『ファウスト第二部』第四幕の構図——」及び「プロメテウスの末裔 悲劇、死、そして救い——『第二部』第五幕のファウスト——」は、それぞれ「ゲーテ自然科学の集い」学会誌『モルフォロギア』第33号、第34号に発表している。主として『第二部』第四幕、第五幕を対象に、テキストにおける〈歴史〉〈神話〉〈自然〉の関係性に特に着眼して『ファウスト』の特殊な「歴史性」の解明を試みている。

発表論文は、頂いた貴重な批評も参考にさらに推敲し完成度を高め、既発表の他の論文とともに『ファウスト研究』として集大成す

べく準備中である。以下、上記3論文を中心に、その要旨を摘記・紹介するかたちで、本研究の成果および意義について手短かに報告したい。

(1) 「ヘレナ劇はどこで演じられているのか?——ヘレナの〈現実性〉をめぐって——」

「ヘレナ劇」については、論者自身、すでに主として作品内在的解釈によって、「詩人・芸術家」ファウストによる内面的な創造のドラマととらえ、数本の論文を発表してきた。そのヘレナの「現実性」「歴史性」を再検討した本論文では、「ヘレナ劇」において使われている重要なモチーフを、テキスト成立時のゲーテの強い関心事でもあった社会現象、例えば「ファンタスマゴリア」「飛行船」「ギリシア独立戦争とバイロン」といった問題の地平から文学社会学的に読み直そうとした。これは期せずして、作品内在的解釈と文学社会学的方法との方法論的・実践的総合の試みとなった。これによって、より広い総合的な視点を獲得することが可能になったばかりか、従来の解釈による単なる「美」の悲劇にとどまらない、「ヘレナ劇」の多義的・多層的側面を浮かび上がらせることになった。

具体的には、①「古典的=ロマン的夢幻劇」ヘレナの成立と当時開発された改良型幻燈装置「ファンタスマゴリア」の本質的な関係②「美」の世界からファウストを「高山」へと運んだ「雲の乗り物」(より広くは「飛行」のモチーフ)における「飛行船」発明の意義③「詩人」ファウスト=ゲーテの想像力にはたらいたギリシア独立戦争とバイロンの参戦・戦死と「対象的文学」としてのヘレナ劇の「時間」の問題、等について考察した。

(2) 「山と海、そして火と水——『ファウスト第二部』第四幕の構図——」

『ファウスト』研究史において従来軽視されてきた第四幕を、第五幕で全面的に展開される「行為の悲劇」ないし「支配者の悲劇」の出発点にして、同時に「ヘレナ悲劇」と第五幕、さらには『第一部』と『第二部』を繋ぎ、詩篇全体をまとめる要石的な役割として位置づけ、その「構図」を解明しようとした。この作業を通じて、『ファウスト』の特殊な「歴史性」——歴史上の魔術師・占星術師ファウストが生きた16世紀から第五幕の背景となるゲーテの生きている19世紀初頭までの300年を包含する——「歴史性」の本質の一端を明らかにすることができた。

その際、特に着目し、手掛りになったのは、M・ビルク(1989)が『遍歴時代』から借用して展開した Symphronismus という概念で

あった。この概念において重要になるのは、「同時代的 (synchronistisch) というより同意義的 (symphronistisch) な行為や事件」である。「同意義的」に対置される事件や人物がアナロジーによって相互に反映し合い、「より内密の意味を読者に開示する」。

具体的に検討し有効であったのは、以下の諸点である。①「古典的ヴァルプルギスの夜」に始まる火成論・水成論の論争とメフィストの展開する「悪魔の自然観」②『第一部』契約の場と「高山」におけるファウストとメフィストの対話 ③「古典的ヴァルプルギスの夜」の侏儒族たちと黒鶴の戦いや第四幕の戦闘とルカヌス『パルサリア』の戦争観。

こうした考察を通じ、第四幕全体を規定している「人工」と「自然」との対立——「山と海、火と水」の構図が浮かび上がってくる。

(3)「プロメテウスの末裔 悲劇、死、そして救い—『第二部』第五幕のファウスト—」

第五幕は「支配者」ファウストの悲劇と死、さらに「天上の序曲」と対をなす一種のエピローグ「山峡」の場において「救い」が描かれ、全篇をしめくくる最重要な幕といえる。悲劇はすでに第四幕に始まっており、「高山」で披露されるメフィストの「悪魔の自然観」、「力づく」による火成論的自然観こそ、第四幕、五幕を通じてファウストの行動を、そしてその結果としての悲劇を基礎づけている。そこでは、ファウストは「力」によって自然を征服し、自然の主になろうとして挫折する。すなわち「所有権・支配権」を望むファウストは、第四幕で「魔術」の力によって戦争に勝利し、獲得した海岸一帯の土地を技術の粋を尽くした干拓事業によって水から奪おうとする。火と技術（「人工」）による「自然」の支配であり、近代的行動主義者ファウストは一人のプロメテウスの末裔として現れる。ここには晩年ゲーテのドイツにも押し寄せていた近代化の波、産業革命、技術革新、それに付随する様々の問題が反映している。

しかし、自然を支配できると驕るファウストも、自らが「自然」の一部であるという事実から逃れることはできない。彼もまた老いと死を前にしている。近代の歴史的世界を背景にした悲劇は、人間の存在論的悲劇と不可分に結びついている。〈歴史〉の奥に〈神話〉と〈自然〉が浮かび上がる。おなじ意味で、ファウストの「救い」についても多面的・総合的に解釈することが求められる。『ファウスト』を祝祭劇『パンドラ』と比較考察し、ファウストをプロメテウスにして同時にエピメテウスと捉えることで、ファウストの「救い」の本質的意味の一端が明らかになる。

具体的な考察の対象とされた主な主題を以下に挙げると①「宮殿とあばら家」のトポス

とオウイディウスのピレモン・パウキス夫婦  
②ホラーティウス『カルミナ』における同じトポスの扱い ③ 死の死者としての「憂い」とファウストの「盲目の希望」④プロメテウスとエピメテウス⑤「救い」としての「記憶」

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①田中岩男「ヘレナ劇はどこで演じられているのか?—ヘレナの〈現実性〉をめぐる」、『文学における不在——原研二先生追悼論文集』、12-25、2011、査読有

②田中岩男「山と海、そして火と水——『ファウスト第二部』第四幕の構図——」、『モルフォロギア』、33号、49-73、2011、査読有

③田中岩男「プロメテウスの末裔 悲劇、死、そして救い——『第二部』第五幕のファウスト——」、『モルフォロギア』、34号、113-146、2012、査読有

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 岩男 (TANAKA IWAO)  
弘前大学・人文学部・教授  
研究者番号：70091618

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：